

## 「国統区」文化活動における「西南劇展」の位置

阪 口 直 樹

### はじめに

1937年以後の日本による中国侵略の全面化は、中国経済の近代化を停滞させたばかりか、半封建・半植民地的状態を固定化することになったが、日本の支配形態の違いによって、「国統区」(国民党支配区)、「解放区」(共産党支配区)、「淪陥・植民地区」(日本支配区)の3地区における文化・文学の地理条件に大きな差異を生じ、それぞれの特殊事情にもとづく文学を創出することになった。<sup>(1)</sup>

そのうち、重慶・桂林・昆明・香港等の「国統区」では、国共関係、国民党の派閥等の政治的状況、都市と農村を基盤とする文化的二重性を背景にして、複雑な形で展開する。臨時首都重慶では、「文協」(中華全国文芸界抗敵協会)の活動(劇団・戦地慰問団など)が継続するが、国民党文化政策を掌握した「CC派」(国民党情報組織の一つで「Central Club」の略)は、「文運会」(国民党中央文化運動委員会)の各種活動(経済援助、文化講演会、出版など)を通して、多数派形成を図っていった。一方、中央から距離を持ち、比較的自由的な雰囲気を持った昆明では、西南連合大学の教授たち 費孝通・呉袁・沈從文らは、リベラルな立場から学術活動を展開する。“剛性・尚力の文化”を主張した雷海宗・林同濟・陳銓らの「戦国派」も、こうした学術的な角度からの、抗戦という特定の歴史時期における文化ナショナリズムの反応であり、西欧的文化の民族化であると見なせるだろう。<sup>(2)</sup>

「言語文化」1-1: 47 - 69ページ 1998.  
同志社大学言語文化学会 © 阪口直樹

一方桂林地区は、政治文化ともに上述の二都市とは別の状況下にあった。抗戦以前に人口5～6万の小都市だった桂林には、抗日戦争勃発後、南京、上海、江蘇、浙江、武漢、広州などから、大量の知識人・文化人が集まり、次第に「大後方」における文化的中心となり、“文化城”と呼ばれるようになった。<sup>(3)</sup> この集中現象は政治的理由も関係している。桂林は民国初期から、一貫して「桂系」と呼ばれる軍閥の拠点で、抗戦時期は特に反蒋介石色彩が鮮明であった。李宗仁・白崇禧・黄旭初ら「新桂系」は、蒋介石と対抗するために、一方で、大衆の支持を獲得して政治的地盤の強化をはかり、他方で政治的経済的自立を図るために、いわゆる“三自”(自治、自衛、自給)政策のもとに、村民・市民大会の開催、国民教育運動、民団や幹部学校の組織化などを進めて行った。さらに彼らは、反蒋介石の立場を強化するために、皖南事変(41)以後、国民党主流派との矛盾を激化させていた左翼文化人を、積極的に受け入れていったのである。

桂林政府当局は、そのための具体策として、「広西建設研究委員会」を設けて、千家駒、張鉄生、沈志遠、張志讓、盛成、陳翰笙等の学者文化人や、茅盾、夏衍、柳亜子、胡愈之、邵〇麟、葛琴、司馬文森、宋雲彬、巴金、王魯彦、韓北屏、艾蕪、聶紺弩、孟超、端木〃良、駱賓基、鳳子、秦牧、吳紫鳳、陳蘆荻、艾青、熊佛西、林林、黄寧嬰、汪鞏、秦似、華嘉、謝加因、安娥、陳残雲、胡明樹、馬国亮、鷗外鷗、于逢、易鞏、黄慶雲などの作家、さらには田漢、欧陽予倩、章泯、洪深、焦菊隱、馬彦祥、唐槐秋、瞿白音、杜宣、洪道、許之喬、万籟天などの戯劇家たちを大量に収容したのである。これにともなって、生活書店、新知書店、読書書店、黎明書店、科学書店、開明書店などの書店や、読書生活出版社、文化供給社、南方出版社、文献出版社など20以上の出版社が、続々と桂林に移転してきて、多くの出版物を発行した。そのなかに雑誌では『国民公論』、『広西建設』、『野草』、『文芸生活』、『文学訳叢』、『中国文芸雑誌』、『中国詩壇』、『詩』、『詩創作』など、新聞では『救亡日報』、『広西日報』、『大公報』、『力報』、『掃蕩報』などがあった。<sup>(4)</sup>

戯劇は、抗戦時期に最も活動が活発であったジャンルで、「新たな戯劇団は全国規模では2千数百の単位に達し、数十万にのぼる旧劇工作者以外に、話劇工作者だけで6万余人にまで拡大している。このため、戯劇の直接的影響は65万余人に達し、その他の重要な劇団や観衆を合せた総数は千数百万をくだらないだろう」<sup>(5)</sup>といわれたくらいである。桂林当局もこのジャンルを重視して、「広西戯劇改進協会」を組織したり、あるいは「広西省立芸術館」(以下「芸術館」)を建設するための援助策を講じたりしたのである。特に「芸術館」は、欧陽予倩を館長に1940年に設置され、実験劇団と桂劇団を付設した本格的な規模を備えたものであった。本稿のテーマである「西南第一屆戯劇展覽会」(以下「西南劇展」)は、「芸術館」新館のこけら落としを兼ねて計画されたが、西南各地から33の劇団を招き、3ヶ月にわたり、12万人を超える規模で開催され、おそらく民国時期を通じて中国文芸界最大のイベントとなったのである。

だがこれまでは、桂林という地域で活発に展開された文芸状況については、茅盾や胡風らが個別作家研究にからんで触れられる以外に、ほとんど無視されてきたことは意外というほかはない。その理由として、台湾においては「反蔣」派という政治的理由があり、他方中国においても、国民党政府の“ひさし”を借りるという複雑な活動が、正当に理解されず、かえって“黒劇展”として政治的に抹殺される状況が継続してきたことがあげられよう。例えばこの「西南劇展」が中国で名誉回復され、歴史の舞台に戻りはじめるのは、共産党第11回3中全会以後のことである。もうひとつ付け加えるならば、抗戦後期に桂林が日本軍の爆撃にあい、関係資料がほとんど焼失したことをあげるべきだろうか。

80年代に入って、桂林の広西戯劇研究室や広西桂林図書館が中心となって、関係資料の修復作業に取りかかり、1984年に“抗戦時期桂林文化運動資料叢書”<sup>(6)</sup>として再現されたのである。また個別資料としては『当代文芸』が重要かも知れない。同誌は熊佛西が当時最高の発行部数(1万部)を誇った

『文学創作』と平行して、1944年1月1日に桂林で創刊し、同年5月6日第1巻5・6期合刊で終刊を迎えた雑誌で、いわば「西南劇展」と運命をともにしたことになる。事実同誌には、「西南劇展」に関する重要資料が大量に掲載されており、例えば創刊号の欧陽予倩「關於西南第一屆戲劇展覽會」(1944.1)がすでに「西南劇展」の準備経過について報告しているし、同誌第一巻第5・6期(1944.5.6)には、「西南劇展」の特集「劃時代的西南第一屆劇展」が組まれ、天鶴の詳細な概況報告がされると同時に、権麟「一点希望和一点意見」、田漢「宝貴空前的盛挙」などの文章が掲載されている。

本論は、抗戦後期桂林という「国統区」の特殊な文化状況の下に開催された「西南劇展」の姿を、可能な限り再現しながら、国民党文化政策の観点から、文学史上の位置を再検討しようとするものである。

#### ・「西南劇展」開催にいたる経過

そもそも「西南劇展」の構想は、なかば偶然的要素から始まったという。桂林に広西省立の本格的劇場を備えた「芸術館」新館が建築されることになり、館長に予定された欧陽予倩が、落成記念事業としていくつかの劇団を招こうとしたのが発端で、その後準備過程のなかで次第に規模が大きくなっていったらしい。この「芸術館」は、最初新中興業会社が受注して工事が始まり、急激な物価高のなかで一旦中止状態に追い込まれたが、建築会社が文化事業としての重要性を認識し、あらゆる犠牲をはらって、結局予定時期を15日早めて完成したという。さらに役者の金素琴が5万元をカンパしたり、映画演劇関係団体から10万元を借金するなど、厳しい財政面での協力体制が整うなかで「西南劇展」準備作業が進められて行った。<sup>(7)</sup>

1943年11月17日に、「芸術館」を主とし、桂林の戯劇工作者が協力して準備委員会が作られた。その準備委員会主任には欧陽予倩、主任秘書に瞿白音、さらに準備委員会委員には田漢、熊佛西、瞿白音等35人が決定した。それを受けて広西省立芸術館、新中国劇社及び関係工作人員135人が準備工作にあ

たることになった。さらに12月7日には「西南劇展」は正式に広西省政府に認可され、省政府主席黄旭初が正式に「西南劇展」会長就任を受諾することとなった。合計229人に及ぶ膨大な大会組織委員会は、名誉（原文は名義）会長17人、指導長19人を数えたが、これらはほとんど名義のみであったという。

例えば、会長は広西省主席黄旭初が担任し、名誉会長には李済深、李宗仁、白崇禧、陳誠、陳立夫、張治中等が、また指導長には潘公展、蔣経国らがあつたが、実際の実務は、欧陽予倩ら準備委員会メンバーによって担われた。準備委員会と常務委員会の下には、秘書処、総務部、招待部、宣伝部等の事務機構が設けられた。この組織機構は、主席団として黄旭初、欧陽予倩、田漢、瞿白音、熊佛西、趙如琳、向培良、黄朴心、孟君謀を選出し、論文審査委員会の主任委員には田漢が、また同委員会委員として瞿白音、趙越、欧陽予倩、趙如琳、陳卓猷、趙明が選出された。1944年2月12日に、準備会は各界人士百余人を招待して茶話会を開催した。続く15日午後3時には、「芸術館」の新築ビル落成式が同ホールで開催された。

参加者は会長黄旭初の代理黄樸心及び全国劇協常務理事張道藩のほか、国民党の政治・軍事・外交責任者、文化界の各代表及び社会的著名人で、張任民、呂競存、劉士衡、蘇新民、劉藜菁、郭德華、邱昌渭、郭德潔、陳邵先、千家駒や、「西南劇展」の主任委員である欧陽予倩、準備委員の田漢、熊佛西、李文酥、趙如琳及び西南8省の戯劇工作者など千余人と、戯劇団23であった。欧陽予倩はそこで経過報告を行い、最後に各劇団を代表して趙如琳が挨拶を行った。落成式ではさらに、中国芸術劇社及び夏衍、于伶、宋之的、司徒慧敏、金山、鄭君里、史東山、杜宣ら戯劇家の祝電10通が披露された。その夜は、国民戲院で盛大なレセプションが挙行され、各劇団によって京劇、桂劇、活報劇（時事問題などのニュースを素材とした即興劇）、音楽、奇術、雑技等の演目が上演された。これが「西南劇展」の実質的な開幕式となった。<sup>⑧</sup>

## ・「西南劇展」開催の状況

1944年2月15日から5月19日まで、92日にわたって開催された「西南劇展」は、抗日戦争時期における最大規模の演劇大会となった。その規模とは、7つの省と5戦区から各種劇団33、観光団体8、戯劇工作者894人が参加し、179回公演されたほどで、その演目は話劇（日本の新劇にあたる）31、京劇28、桂劇（広西チワン族自治区の地方劇）9、人形劇5つの他、新歌劇、奇術、サーカスなど、観客は延べ12万人以上（切符販売数は、「芸術館礼堂」が26,203枚、「国民大戲院」が28,860枚、「社会服務処」「桂林戲院」が2,201枚、「広西劇場」1,428枚で総計48,703枚、「公共体育场」を合わせて5万人以上）を動員した。この他「戯劇資料展覧」は15日間で、參觀人数36,592人のほり、「戯劇工作者大会」は3月1日から17日まであわせて16日間開かれ、「戯劇公約」を含む各種提案36項が承認された。「西南劇展」の活動は大きく三部分 「戯劇演出展覧」、「西南戯劇工作者大会」、「戯劇資料展覧」からなるが、さらに余興交歓会的性格の「活報大会串」も行われ、大会終了日には、1千名以上の参加者が芸術館劇場に集まり“狂歡之夜”を挙行した。話劇や「活報劇」のほか、人気者の金素琴、金素秋の妙技、さらに「四維兒童劇団」の子供たちも参加して、“徹夜”でのお祭り騒ぎとなったくらいである。

この“大盛況”の「西南劇展」も、公的援助は少なく、経済的には厳しい運営が迫られたようで、大会経費約四百余万元は、各劇団の上演収入から2割を徴収し経費に充当する以外に、当面の支出はすべて桂市戯劇同業公会から20万元を借用し、さらに金素琴が京劇をボランティア公演をして、得た義援金5万元をカンパした。「西南劇展」期間において、桂林市内のすべての劇場では、入場料を統一価格とし、特別席では話劇60元、京劇50元、桂劇40元、其他は30元とした。大会終了後、大会全体で負債を100万元抱えたり、各劇団の負債も山積みで、10万元にも達する赤字を抱えた劇団もあったほど

だという。<sup>(9)</sup> 以下、「西南劇展」の諸活動を、各分野ごとに詳しく見ていきたい。

#### 1. 戯劇公演について

「西南劇展」の最も中心的な行事は、当然戯劇公演であったが、そのジャンルと規模の大きさも目を見張るばかりであり、プログラムを見ると、話劇23、歌劇1、京劇29、桂劇8の演目および民謡・舞踊、人形劇、奇術、サーカスなどである。さらに上演回数についてみれば、話劇133回、歌劇6回、京劇8回、桂劇3回、その他20回と総数170回にのぼっている。それらは、公演は「西南劇展」に先立ち設けられた5カ所の劇場で行われた。その第1公演場としての「芸術館」には延べ約26,200人が入場し、第2公演場としての「国民戲院」には延べ約28,860人が、また第3公演場「社会服務処」では約2,200人が、第4公演場「広西劇場」では1,428人が入場し、総計48,700にのぼり、また第5公演場としての「公共体育场」では、およそ約5万人以上が参観したという。<sup>(10)</sup> いま参加劇団の上演予定リストから演目を紹介してみる。

#### (1)話劇（翻訳劇を含む）

《百勝將軍》、《油漆未乾》、《茶花女》、《水郷吟》、《虎符》、《蛻變》、《家》、《法西斯細菌》、《第7号風球》、《軍民進行曲》、《塞上風雲》、《海恋》、《浪漫夫人》、《皮革馬林》、《飛花曲》、《錢》、《愁城記》、《重慶二十四小時》、《勝利進行曲》、《杏花春雨江南》、《旧家》、《戯劇春秋》、《日出》、《東方的暴風雨》、《終身大事》、《屏風後》、《醉了》、《一只馬蜂》、《壳買》、《一個女人和一条狗》、《豊収》、《梅雨》、《南歸》、《街頭人》、《父帰》、《月亮上昇》、《母親》、《未完成的傑作》、《基爾伯特》、《沈淵》、《鞭》など。

## (2)京劇、桂劇（粵劇、湘劇、楚劇を含む）

《五人義》、《一匹布》、《定計化縁》、《賺馬記》、《封相》、《文章会》、《小放牛》、《大補罐》、《雪擁蘭閣》、《長坂坡》、《御林郡》、《喜榮帰》、《紅龍洵》、《張文祥刺馬》、《槍死頼閻端生》、《江漢漁歌》、《梁紅玉》、《徽欽二帝》、《太平天国》、《恩与怨》、《梯政之死》、《武則天》、《文天祥》、《岳飛》、《班超》、《桃花扇》、《木蘭從軍》など。

(4)その他、映画、人形劇、サーカス、奇術、特殊民族歌舞等があった。<sup>(11)</sup>

## 2. 戯劇工作者大会

「国統区」における戯劇運動の経験交流会としての「戯劇工作者大会」は、1944年3月1日から15日間にわたって開催され、広東、桂林、湖南、昆明、貴州などから32の代表及び重慶中華全国劇協の派遣代表あわせて530人が参加した。

大会の予備会議（第1次）は1月23日に開催され、3月1日に「戯劇工作者大会」を開くこと、会期を1週間とすることを決定した。さらに2月29日には、「戯劇工作者大会」宣伝組が記者招待会をおこない、大会準備経過を報告した。桂林市の記者以外に、《中央日報》、昆明《国民日報》、衡陽《大剛報》、《力報》、《大華晚報》、湖南《中央日報》、《国民日報》、広東《中山日報》、広西《柳州日報》及び文化新聞社などから記者が参加した。

「戯劇工作者大会」は3月1日午前9時に「芸術館」で挙行され、主席団席には黄旭初（黄樸心代理）、欧陽予倩、田漢、熊仏西、趙如琳、瞿白音、孟君謀が参列し、論文審査委員会には、主任委員の田漢を含め7人が選出され、また提案審査委員会は、主任委員趙越と学术研究、生活教育、運動実践の各班の班長6名で構成されること、他に18名の委員によって京劇、地方劇、

桂劇、話劇等に関する提案審査にあたることが決められた。

また秘書室主任には田念萱が、総務組主任には董萃が、会程組主任には張友良が、会場組主任には呉剣声が、宣伝組主任には汪鞏が、學術組主任には胡五禾があたることとなり、それぞれの組ごとに委員4名が選定された。大会当日の参加劇団は、広西省立芸術館、新中国劇社、凱声劇団、西大青年劇社、立達中学劇団、復興劇団、広東省立芸専、劇宣四隊、劇宣九隊、衡陽中国実験劇社、衡陽社会劇団、広東芸宣大隊、第×戦区政治大隊、南陽被服廠劇教隊、(曲江)中国芸術劇団、中大劇団、江西特派話劇代表団、昆明華山劇社、江西特派平劇代表団、桂林四維平劇社、周氏兄弟馬戲団、李天影魔術団、桂劇実験劇団、柳州四維平劇者、仙樂桂劇団、傀儡戲劇団、教育部劇教隊、第×戦区辺政大隊等団体などであった。

その他大会期間中に、《呈請政府改善劇本出版和演出審査制度》、《加強軍中劇運》、《提高工作積極性、克服有害偏向》、《組織前線勞軍》等の提案が承認され、閉幕にあたっては10項目にわたる「戲劇工作者公約」を了承した。その具体的内容は以下のとおりである。

1、認清任務(任務をはっきり認識する) 2、砥礪氣節(意気を高く) 3、面向民衆(大衆に目を向ける) 4、面向整体(全体を考える) 5、精研學術(學術を研鑽する) 6、磨練技術(技術を鍛える) 7、効率第一(効率第一) 8、健康第一(健康第一) 9、尊重集体(集団を尊重する) 10、接受批評(批判に耳を傾ける)

閉幕式は17日午前9時、広西「芸術館」ホールで挙行され、35件の提案を承認し、主席団によって大会宣言を草することを決定した。<sup>(12)</sup>

### 3. 戲劇資料展覽

「西南劇展」の第3番目の重要な行事として「戲劇資料展覽」があげられ

る。これは1944年3月17日から15日間の日程で、「芸術館」新館で挙行された。もと3月1日開幕予定であったが、準備が間に合わず、2度にわたり延期されたという。展覧室は4室からなり、第1室は資料全般の展示で、第2、第3室は各劇団の資料、第4室は個別資料が展示されていた。

第1展覧室においては、中国話劇の歴史的資料が展示され、維新を鼓吹した「春柳社」から「南国社」までと、さらに武漢時期の話劇にわたる変遷と活動が含まれていた。例えば軍事委員会政治部劇宣七隊の、歴史、文献、統計図、図表、舞台写真、生活記録、創作シナリオ、舞台模型、宣伝品等を含む資料も展示されていた。

第2展覧室は、劇宣七隊の資料が展示されており、照明や装飾で工夫をこらした最もしゃれた部屋となっていた。図表も文献もシナリオもすべて美しく配置され、歌曲創作の多さもこの隊の特色となっていた。第3展覧室は2階にあり、劇宣九隊の関係が納められており、資料装丁にも工夫がこらされ、長く屏風式に配列されていた。

3階部分は第4展覧室となっており、四維平劇社、桂劇学校、周氏兄弟馬戲（サーカス）団、広西省立芸術館と桂林新中国劇社の、合計5団体に関する資料が展示されている。また今回参加が認められた旧劇に関する資料は、最高の水準にあり、空前のできごととなった。その他、最も参加者が多かった広東省立芸術専科学学校や、二つの大学劇団（広西大学と中山大学）の資料もそれぞれの展覧室に展示され、その活発な活動状況を示していた。

展示品は、22団体と80個人から、各団体文献資料375件、写真205枚、統計図表56種、舞台模型62、京劇臉譜163、シナリオ原稿25、舞台設計図64枚、京劇と桂劇に関する珍本79を含め1,029件にのぼる戯劇資料を集めて展示し、延べ参観者36,592人を動員したのである。<sup>(13)</sup>

#### 4. 活報大会串（大交流会）

会期中に活報大会串が開催されたことも注目されるかもしれない。「活報

劇」はもと1923年モスクワで上演された「時事劇」が、30年代に上海から「国統区」(武漢・桂林など)へと、状況にあわせて変化発展をとげてきたものである。このように各劇団が、題材も自由に選択できるものであったから、参加希望演目も12にのぼったが、4月19日午後「芸術館」で挙行された際には、文化界新聞界を含め千名以上が参加した。田漢が当日「活報大会串の意義」の挨拶をおこない、「活報劇」が現実を速やかに反映でき、戯劇運動における重要なジャンルであると指摘した。続いて活報劇が上演されたが、その演目は《黄昏沙坪》(劇宣七隊)、《傷兵医院》(劇宣四隊)、《一盒火柴》(新中国)、《幕後風光》(劇展舞台組)、《七年了》(劇宣四隊)などがあった。さらに「西南劇展」が5月19日閉幕する時にも、《七年了》(劇宣四隊)、《沙坪之夜》(劇宣五隊)、《一盒火柴》(新中国)や、大型活報劇《幕後風光》が夜の7時から明け方4時まで連続して上演され、会場は熱気に満ちたものとなった。<sup>(14)</sup>

### 参加劇団の紹介

ここでは「西南劇展」に参加した劇団数について具体的に見ていきたい。地元の広西地域からは、話劇では「広西省立芸術館話劇実験劇団」、「新中国劇社」、「凱声劇団」、「広西大学青年劇社」、「立達中学劇団」、「復興劇団」、「軍事委員会政治部劇宣四隊」、「四戦区政治部政治大隊」など8つの劇団で、京劇方面では「桂林四維平劇社」、「四維児童班」、「桂林平劇工作社」、「柳州四維平劇社」など4つの劇団があり、さらに桂劇方面では「桂劇実験劇団」、「仙楽桂劇社」、「桂劇学校」など3つの劇団が参加した。

その他「広西省立桂嶺師範边疆歌舞団」、「中華全国文芸界抗敵協会桂林分会傀儡戲(人形劇)研究組」、「周氏兄弟馬戲団」、「精武技術団」、「天影魔術団」など等雑技関係の劇団があった。また広東から来たものに、「広東省立芸術専科学校実験劇団」、「軍事委員会政治部劇宣七隊」、「七戦区政治部芸宣大隊」、「中山大学劇団」、「中国芸聯劇団」など5つの話劇劇団があったし、

湖南からは「軍事委員会政治部劇宣九隊」、「衡陽社会服務処社会劇団」、「衡陽中国実験劇社」、「第三被服廠戲劇教育隊」など4つの話劇劇団が、さらに江西からは「教育部戲劇巡回教育隊」、「江西省会戲劇工作者代表団話劇組」、「平劇組」など3つの劇団があり、雲南からは「昆明華山劇社」があった。これらを合せると、話劇劇団は20、京劇劇団は5つ、桂劇劇団は3つ、その他5つで、「西南劇展」に実際に参加した劇団は計33、俳優の人数は計894人にのぼっている。

瀬戸宏氏は「演劇隊について 演劇九隊を中心に」<sup>(15)</sup>で、演劇隊のなかで歴史的に代表的な位置を占めていた「演劇九隊」について詳細な紹介をおこない、この劇団も「西南劇展」には開幕7日後の21日に到着し、活動に参加したことを指摘しているので詳細はそちらにゆずるとして、ここでは「劇宣第四隊」、「七戦区芸宣隊」、「新中国劇社」、「広東芸専」、「社会劇団」などいくつかの劇団にしばってそれらの経歴や性格を、当時の記事から整理しておきたい。<sup>(16)</sup>

#### 1. 「劇宣第四隊」

「劇宣第四隊」は、1937年上海で成立している。最初は「上海演劇第三隊」といい、鄭君里が隊長であった。のち「軍委会政訓処抗敵劇団」になり徐韜が隊長に任じられた。続いて「軍委会政治部抗敵劇団」、「抗敵演劇第一隊」、「第<sup>マ</sup>戦区政治部芸宣隊」等を経過して、「劇宣第四隊」となった。隊長は魏曼青、副隊長は作曲家舒模で、隊員35人を擁している。彼らはこの7～8年の間に、10の省、235の県市を移動し、479場（多幕劇22、独幕劇52、幕表劇28）を上演している。その観客数は、兵士で24万人以上、民衆は約40万人以上にのぼっている。彼らは上演活動と共に創作も行っており、6つの多幕劇、22の独幕劇、28の幕表劇を創作した。そのうち、張客《最後一顆手榴弾》、李超《開小差》と《霸王山》および集団創作の《辺城之家》などは、かなり有名になったものである。歌曲の方面では、舒模の《斉動槍》、《大家唱》、

《王老二当順民》がある。

## 2. 「七戦区芸宣隊」

「七戦区芸宣隊」の前身は七戦区の政治大隊で、その政治大隊は、広州時代の「鋒社」・「芸協」と「藍白」の3つの話劇団体が合併してできたものである。広州時代に、この3つの話劇団は広東省戯劇運動の主力であり、広州を撤退後、彼らはその戯劇を軍隊のなかに持ち込んで行ったのである。前者は第63軍の「芸宣隊」であり、後者は第12軍の「芸宣隊」であり、この2つの兄弟劇団は一貫して広東の前線で軍隊の戯劇運動を担当してきた。この3年あまり、彼らはたえず移動公演を行い、軍における戯劇幹部を養成するとともに、広東の前線における広大な農村に戯劇教育の基礎を打ち込んだ。1941年7月、軍隊制度の改正にともない、合併して「七戦区政治大隊」となった。その後彼らは《忠王李秀成》を公演したが、これらは大反響を呼び、大量の旧劇愛好家を引きつけた。

## 3. 「新中国劇社」

桂林戯劇界における中核的劇団のひとつである「新中国劇社」は1941年10月に成立した。それは田漢が指導し、青年演劇人が自ら組織した民間の職業劇団である。その中心的メンバーのすべては、かつて抗敵・救亡の劇団に参加した経験をもっている。1942年年末に、劇団は衡陽、湘潭、長沙などを移動公演し、社会的影響を拡大したばかりか、経済的基盤も強化することができた。1943年の秋に桂林に戻ってくると、沈滞した桂林の戯劇界を活発にさせた。成立後、3年間で彼らが公演した演目は、多幕劇、独幕劇合せて31にのぼる。民間の劇団であるから経済状況が極めて厳しく、30数名の劇団員には一人毎月200元的生活費を支給しているが、劇団にとっては大きな負担となった。

#### 4. 「広東芸専」

校長は趙如琳で、「西南劇展」参加メンバーは75名である。この団体は「広東芸専」戯劇科の卒業生と戯劇科、実験劇団、師範科などが合同して組織された。その編成は、衣装、道具、照明、セット、演技者、メイク、舞台装置、効果の8チームから成り、すべて有機的に構成されている。桂林における2ヵ月間の経費として20万円を必要としたが、広東省政府はわずか数万円を補助したのみで、団員はそれぞれ旅費・食料費として1,500円を負担し、残りは桂林での公演費で穴埋めすることになった。

#### 5. 「社会劇団」

「社会劇団」は衡陽社会部社会服務処文化部門に所属する話劇劇団で、指導者は邱星海である。彼らは衡陽戯劇運動における中核的存在で、《銭》を公演してから、名声はとどろき、強固な基礎を確立した。衡陽において彼らが有利な条件を持っていたのは、自前の「社会劇場」を所有していたため、少なくとも劇場支配人の搾取を受けることがなく、他劇団の羨むところとなった。劇団の陣容は充実しており、呉淑昆、沈良、劉年、鄭賢、汪怡芳、高博、陳静ら20数人の団員を抱えていた。かつて《珍珠》、《未婚夫妻》、《早餐之前》、《生財有道》、《三塊錢国幣》、《压迫》、《銭》など10余りの劇を上演した。なかでも翻訳劇《銭》は前後10回以上も公演され、大反響を呼んだものである。このほか、中国実験劇団と合同で曹禺の《家》を上演したこともある。この劇団は「中国実験劇団」と人的交流も深かったが、その劇団員が経済的基盤の強い「社会劇団」に移籍するものが多く、両劇団の内部矛盾が激化したこともある。

#### 6. 「広西大学青年劇社」

「広西大学青年劇社」は大学の名前を使って参加した劇団の一つである。この劇団は、1937年に梧州で成立し、その後桂林に移ってきてから、有名な

戯劇家焦菊隠が大学で講義を担当したこともあり、活発な活動を行うようになった。この数年来、彼らは《湖上の悲劇》、《一只馬蜂》、《刑》、《瑪麗》、《這不過是春天》、《日出》、《煉》など10いくつかの戯劇を上演した。そのほか桂林では宋之的の《霧重慶》を連続4日間連続上演し、好評を得た。

#### 7. 「中国実験劇団」

衡陽「中国実験劇団」は桂林の「新中国劇社」に相当し、両者はいずれも両地における唯一の職業劇団である。成立したのは1944年1月で、責任者は程嘉朔である。彼らは《杏花春雨江南》を衡陽で上演したが、すぐさま現地の反響を呼ぶとともに、政府からの援助を受けることになった。第2回の上演は「社会劇団」と合同公演した曹禺の《家》であったが、充実した陣容だったためか、10数回連続上演し、衡陽における入場券販売記録を突破した。

#### 8. 「実験桂劇団」

「実験桂劇団」はもと「南華班」から発展したものだが、桂劇の演技者たちは元来考えが古くて、社会的地位も高くなかった。しかし1937年に馬君武が桂林に戻ってきてから、広く各界の名士の協力をあおぎ、「桂劇改進会」を組織し桂劇の再興を図った。このようにして政治経済のバックアップのほか、馬君武や欧陽予倩らの指導を得て、この劇団は桂劇のトップ劇団となったのである。その後欧陽予倩が「芸術館」館長になってから、馬君武の同意を得て、名称を「実験桂劇団」と変えた。欧陽予倩は桂劇改革にあまり熱意はなかったが、この劇団は政府の援助もあり、極めて順調な発展を遂げるようになった。

#### 9. 「辺政大隊観光団」

桂林の南方一帯は、風俗習慣も異なり、教育程度も低かったので、人々を

教育する必要性から、「辺政大隊」が誕生することになった。この劇団は第×戦区政治部に直属しており、大隊の下に2つの隊が設けられ、普段は宣伝工作に従事している。工作は多く口頭、文字、音楽、戯劇などの方式で行われた。全隊には40人のメンバーがおり、そのうち10人はベトナム人で、その他の多くは広東や桂林出身である。

#### 10. 戯劇教育 「桂劇学校」など

広西戯劇改進黨は桂戯を教練することを目的とし、戯劇学校を1941年12月に設立した。学生は26人（男生10人、女生16人）で、年齢は13歳から19歳までである。学生たちの家庭状況は極めて好くて、知識と天分も優れている。学生の出身は桂林や広西のほか、江蘇省など外地のものも多い。もともと歐陽予倩が桂戯改革計画の一つに組み入れたこともあり、彼が校長となっている。カリキュラムは戯劇訓練のほかに、国文、算数、歴史地理、音楽などがあり、教員には桂戯演技者の蕭硯清、王盈秋、謝玉君、劉万春などのほか、「芸術館」館員の多くが担当している。この学校の別の任務は、桂劇の改良であり、《疹火下山》、《汾河湾》、《戦長沙》、《九龍山》などを改革した。

「西南劇展」に参加した学校劇団は3つだけで、全体としては成果があがっていない。抗戦初期には学校戯劇運動も抗戦の必要のために、一般の劇団に協力するかたちで、農村において普及活動を行ったが、次第に沈滞化していった。その原因には以下のいくつかがあげられる。

1、伝統的な誤った観点で、一般の人が戯劇を蔑視するために、高等教育を受けた学校行政者や父兄たちから学生まで、戯劇に対する伝統的な誤った観念を生み出していることである。

2、経済問題で、現在一つの劇団を組織し、背景や器材などをワンセット揃えるだけで、最低10万元以上もかかる。さらに自分の学校で1回公演するだけで最低でも1万数千円必要で、一般の学校にとっては負担がかなり大き

い。

3、公演場所が不足していることで、設備の整っていない今日の学校では、ホール（講堂）さえ満足にない。

4、正規の授業を妨げることで、戯劇工作が正規の授業と衝突することもしばしばある。

5、舞台技術が未熟であること。学校劇団はプロではないから、舞台における技術は勿論未熟であるが、舞台装置、照明、効果、化粧などの技術は専門の人材を得がたいために、これも戯劇運動の発展を阻害している。

## ・ 国民党の内部状況と「西南劇展」評価

### 1. 「新桂系」と「CC派」の対立

広西省政府の「西南劇展」に対する保護と援助（会長、名誉会長、指導長などに広西省当局や国民党の軍事政治の要員が当てられた）が、国民党派閥の勢力争いを背景にしていたことについては上述したが、それは具体的には、安徽省や広西地方における「新桂系」と「CC派」の対立として現れた。<sup>(17)</sup>

1936年9月17日、蒋介石は李宗仁と連合を結び、表面的に友好的な関係を回復したが、両者は広西地区においては、なお勢力争いは激しさを失わなかった。特に国民政府が重慶に遷都してから、中央訓練団など多くの中央政府機関の移転や、省都移転をめぐって「CC派」による取り込み活動が活発化した。しかし、「新桂系」はさまざまな手段を使って反撃を試みた。そして、李品仙が省政府主席に着任すると、“党政軍一元化”を口実に、党政軍総辦公庁を設け、下部に党務、政務、軍務3つのチームを作り、これを通して「CC派」の封じ込めに成功したのである。また1938年1月に李宗仁が安徽省政府主席に就任してから1949年春にいたるまで、廖切、李品仙、夏威などの「新桂系」は安徽地方で抗日作戦を展開すると同時に、安徽に対する支配を強化し、自己の勢力を拡大し、安徽における「CC派」と権力闘争を展開した。「新桂系」は広西・安徽地区を支配すると、「CC派」に反対する必要から、

各派や無党派人士と連絡を取りながら、各方面から「CC派」を孤立させようとしたのである。

こうした国民党の指導権争いのなかで「西南劇展」が開催されたのだが、対立の片方である「CC派」からみれば不快の念を禁じ得なかったことが想像できる。当時国民党文化政策の中枢を握り、「CC派」の中核人物であった張道藩は、1935年に「国立戯劇学校」を創設し人材を養成し、自分自身も「最後関頭」など多くの脚本を書いた人物だが、彼は国民党中央宣伝部部長（1942.12.7就任）として、「西南劇展」にあわせて2月15日を「戯劇節」に設定した。そして自分自身も「西南劇展」に参加し、“非常な歓迎を受けて”挨拶を行っている。その講演で彼は「国民政府が2月15日を戯劇節に指定した経過と、今回の「西南劇展」が全国戯劇節に重大な意義を付与することを述べて、芸術館新館は地方政府が初めて建設した重要な戯劇建築物であると極めて高く評価した」という。だが、彼が戯劇工作者よりも、観客の重要性を強調したことについて、特に左翼演劇人などから強い不満がだされたことから、両者に緊張関係が存在したことがうかがわれるが、張道藩のちに、桂林訪問に関して次のように回想している。<sup>(18)</sup>

2月中旬、私は桂林に着いた。桂林におけるスケジュールは、丁度8日間びっしりと詰っていて、忙しいことこの上なかった。海外からの帰国者や党政軍各界の人士と接触する以外に、文化界の盛大な歓迎を受けた。これは私の思いがけないことだった。当時桂林に滞在した共産党文化人士や左傾作家はかなり多く、各種文芸書籍の出版や文芸活動も、とても活発であった。ここは共産党の重要な文芸工作基地の一つであり、彼らは上海や香港から逃げ延びてきたが、桂林で仕事をすることもできるし、しばらく足を休めてから昆明や重慶に行くこともできた。……

野心満々の李宗仁は、礼節をつくし、悲憤慷慨して彼らを持ち上げ、彼らに対して特に優遇し、彼らを政治資本であると見なし、例えば戯劇

家欧陽予倩などを広西省立「芸術館」館長に招聘したのである。そして彼らも広西のために大いに宣伝を行い、広西の地方自治を、おひれをつけて描写し、広西の軍隊を鋼鉄のように堅強であると形容したり、広西全土はいたるところすべて敵を埋葬しているとか述べたのである。……

張道藩が表面的な友好的態度とはうらはらに、李宗仁らの態度に愚痴をこぼしていることから、左翼人の取り込みに失敗したことに対する口惜しさを感じられるが、事実彼の他の回想も「西南劇展」に対しては無視の態度を貫いており、「CC派」が「新桂系」と「西南劇展」をめぐる激しい駆け引きを展開していたことが傍証できる。

#### .まとめ

「国統区」における戯劇活動が我々の想像を越える規模で展開されたことは、上で述べたところから理解できるが、それが「軍事委員会政治部」など国民党政府機関における軍事宣伝活動の一環として展開されたこと、さらに国民党内の派閥事情ともからんでいたことも十分考慮する必要がある。1944年2月から5月まで、92日にわたって開催された「西南劇展」は、7つの省と5つ戦区から、戯劇工作者894人が参加し、延べ12万人以上の観客を動員したことも、この流れにおいてとらえる必要があるだろう。「新桂系」の桂林当局者は欧陽予倩という著名戯劇作者・演出家を優遇し、左翼作家を含む一大デモンストレーションを計画し、その成功は蒋介石政権に対する示威ともなったし、同時に共産党勢力に対する威圧的作用ともなり得たかもしれない。

歴史の表面から姿を消した文学的事実は、今や歴史的相対化の必要に従って必然的に浮上されねばならないが、「西南劇展」の再評価は、単なる“復権”の範疇をこえた意味を与えることになるかもしれない。というのは、桂林地区の文芸活動の比重が増大することは、「国統区」における文芸活動の

ありようにも直接的な変更を迫るであろうし、さらに抗戦時期における文学地理全体を塗り替える結果を生み出すことになるかもしれないからである。

## 注

- (1)中国文芸研究会編『図説中国20世紀文学』白帝社 1995年「40年代概説」参照。
- (2)拙著『十五年戦争期の中国文学 国民党文化潮流の視角から』研文出版 1996年。第十章「「戦国派」の文学と文化論」参照。
- (3)藤井省三・大木康『新しい中国文学史』ミネルヴァ書房 1997年。
- (4)周鋼鳴「桂林文化城の政治基礎及其盛況」『桂林文化城紀事』漓江出版社 1984年、『抗戦時期的西南大後方』北京出版社 1997年。
- (5)田漢「戲劇節与西南劇展」『西南劇展』(上) 漓江出版社 1984年。
- (6)『桂林文化城紀事』漓江出版社 1984年、『西南劇展』(上下) 漓江出版社 1984年、『桂林文化城概況』広西人民出版社 1984年、『欧陽予倩的戲劇改革』(上下) 漓江出版社 1984年など。
- (7)「西南劇展会昨日招待各界」同上『西南劇展』(上) 莫濟杰『新桂系史』広西人民出版社 1995年。
- (8)「盛会盛挙盛況空前西南劇展開幕」、「付録1：西南劇展紀事」、丘振声・呉辰海「“ 旌旗此日会名城 ” 西南劇展概述」同上『西南劇展』(上)。
- (9)「西南劇展会昨日招待各界」、「在劇展招待会上欧陽予倩報告籌備經過」、雷特「寄語新術語專家 為劇展票價問題講一言」同上『西南劇展』(上)。
- (10)莫濟杰『新桂系史』広西人民出版社 1995、瞿白音/田念萱「回憶西南第一屆戲劇展覽会」同上『西南劇展』(下)。
- (11)「西南劇展秘書処發起三大活動」、「戲劇史上的空前盛挙 西南劇展開幕」、「劇展節目 全部排定」同上『西南劇展』(上)。
- (12)「戲劇工作者大会今日揭幕」、天鶴編「戲劇工作者大会」、伍倫「学校戲劇教育的實際問題 獻給西南戲劇工作者大会」、短論「戲劇工作者公約」同上『西南劇展』(上)、趙銘彝「西南劇展未發表的宣言」同上『西南劇展』(下)、「劃時代的西南第一屆劇展 三、工作者大会」『当代文芸』第1卷第5・6期 1944年5月。
- (13)「劃時代的西南第一屆劇展 四、資料展覽」『当代文芸』第1卷第5・6期 1944年5月、呉立德・小飛「国統区抗日進步演劇活動の空前大檢閲 1944年西南劇展」同上『西南劇展』(下)。
- (14)白水紀子「中国左翼戲劇連盟下における活報劇と藍衫劇団」『東洋文化』第74号 1994、「西南劇展秘書処發起三大活動」、「劇展大会昨日举行活報大会串」、「西南

劇展会今晚隆重閉幕」同上『西南劇展』(上)。

- (15) 『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』中国書店 1990年。
- (16) 瞿白音 / 田念萱「回憶西南第一屆戲劇展覽會」同上『西南劇展』(下)、《力報》記者「他們是從砲火中成長起來的——介紹演劇宣傳第四隊」、張海「關於“七芸宣”的話」、《大公報》記者「劇展中的話劇團(之一、之二)」、《力報》記者「介紹五個劇團」、深淵「回頭探視圈內人」、散仙「實驗桂劇團的始末」、本朝古人「劇展中桂劇的商討」、本朝古人「桂劇學校介紹」、伍倫「學校戲劇教育的實際問題——獻給西南戲劇工作者大會」同上『西南劇展』(上)、上掲『抗戰時期的西南大後方』、周鋼鳴「桂林文化城的政治基礎及其盛況」上掲『桂林文化城紀事』、上掲莫濟杰『新桂系史』廣西人民出版社 1995年。
- (17) 「五、廣西的文化与教育」上掲『抗戰時期的西南大後方』、上掲『国民党派系鬭爭史』上海人民出版社 1992年。
- (18) 趙友培『文壇先進張道藩』重光文芸出版社 1975年。

## 在“国统区”文化活动上的「西南剧展」的位置

阪口直樹

在抗战时期的“国统区”，戏剧成为了文化活动上的这个战线的最重要的根据地，影响到数以上千万的老百姓的文化生活。其中，桂林由于当了反对蒋介石派系（新桂系）的据点，吸引了全国各地的多数左翼作家，很多出版社和书店集合在一起，酝酿了具备独特色彩的文化状况。引人注目的是从1944年2月到5月份，「西南剧展」（西南第1届戏剧展览会）整整举行了3个月。这个活动的规模可以说是空前绝后，参加的团队一共41个，队员894个，观众也到达12万以上，这个「西南剧展」除了演出许多剧目以外，还办了「戏剧展览会」，召开了「戏剧工作者大会」，进行交换资料，总结经验，获得了意想不到的成功。

太可惜的是由于当时的有关资料几乎被烧掉，国民党政治成绩也统统被否定等种种原因，《中国现代文学史》不但没给它本来应有的位置，而且被当做“黑剧展”完全抹杀了。

本稿的目的在于要用刚搜集起来的各种资料——例如，《抗战时期桂林文化运动资料》（1984）和当时的杂志《当代文艺》（熊佛西主编 1944.1-5），恢复「西南剧展」原来的真面目。论文由以下的内容构成。

序节是概括的介绍抗战时期文化状况（以桂林地区为主）的特殊性和过去的有关研究情况及本论文的目的。

第2节写的是桂林官方和欧阳予倩他们怎样开设「广西省立艺术馆」，怎样准备办「西南剧展」等过程。

第3节围绕「西南剧展」的更细腻的情况——各剧团的经济、卖票、剧场等方面指出它的一些问题。其中包括各剧团演出的节目（话剧、京剧、桂剧、歌剧、傀儡戏、马戏团等），介绍「戏剧工作者大会」、「戏剧资料展览」、「活报

大会串」の詳細内容。

第4节是介绍参加的剧团的规模及沿革等(包括桂林地区的戏剧教育情况)。

最后的第5节是要分析国民党派系(“CC派”和“新桂系”)互相之间的各种矛盾,阐明“国统区”的文化运动所包含的复杂性。

‘The South-Western Plays and Performances’  
in the Cultural Movement of the ‘Area Ruled by Chinese Nationalist Party’

Naoki Sakaguchi

Key words: theater, nationalist party, period of Anti-japanese movement